
脇悪役Aの死に様

望月 朧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脇悪役Aの死に様

【Nコード】

N5439X

【作者名】

望月 朧

【あらすじ】

大切な人を殺してしまいました。そんなチープなバットエンドから始まる一人の愚者の物語。身勝手な奇跡を願うAKUMAに成るべくしてなった変わり者な化け物の戦争観察。これはすばらしき生き様ではなく、生きることから逃げた男の吐き気を催すほど無様な死に様のお話。

オリジナルを含めた出来る限り原作沿い予定の話。主人公はAKUM Aでかなり特殊な男。

とある酒屋にて

例えば。

そう、これは例えばの話だ。俺に前世があつたでしょう。なに、ただの想像にすぎないから確認のしようはないし、作り話の域は抜けることはない。童話を読み聞かせられているとでも考えてくれ。

前世では俺は女だ。・・・妙な願望があるわけではないから、ちゃんと聞け。

俺は女だった。特別美しいというわけでもなければ、別段醜女というわけでもない。その辺にいるような平々凡々な女だ。そして、平々凡々な恋人もいた。まあ、いろいろあつたんだろう。俺はその恋人を殺した。いろいろは色々さ、正直その辺はどうでもいいし今の俺では間違はなく理解できない。嫉妬で、カッとなって、防衛で、なんとなく、狂気で、弾みで。お前の好きなように考えればいい。そうだ、俺は個人的には嫉妬と狂気のダブルパンチというのが一番好きだな。ニンゲンというのはそういったドロドロとしたものがニンゲンらしいというものだろう？

ああ、すまない話がそれだな。そうして恋人の死体に寄り添い咽び泣いていた俺のもとに神様が舞い降りたのさ。

――・・・汝、何故そのように嘆くのだ――

「おお、主よ！私は一生を捧げるべき愛しき人をこの手で殺めてしまいました！こんな十字架を背負ってしまえば、私はもう生きていきません！」

「……汝、それほどまでにその者を愛していたのか？……」

「はい、愛しておりました。最愛の彼をこの手で失った私はどうすればよいのでしょうか。主よ、主よ、主よ！お助けください！我が主よ！」

「……我に誠実なる哀れな子よ、愛しき子よ。汝の哀しみ、我がぬぐい去ろう。奇跡を望むなら、我にその身を捧げ、我が手を取り、冥王から愛しき者を奪い取るのだ……」

そうして、神の手をとった俺は、奇跡をお越し恋人と末長く仲良く暮らしましたとき。めでたしめでたし。

「ん？それからどうなったって？末長く仲良く暮らしたって言っただろう。納得できそうにない、と言われてもなあ。例えばの話だと言っただろう。」

「んー、あんたも案外しつこいな。OK、わかったわかった。続きを教えよう。幸せと奇跡を頂いた俺は恋人と文字通りひとつとなって、殺人マシーンとして、今この世界を渡り歩いているのさ。はは、冗談ではないさ。むしろ冗談であった方が君のためではあったのかもしれないね。」

「そろそろいい感じにハラも減ってキタ。食事ノ時間のようダ、さあ、世界との別レはすませタか？すんでいなくとも、俺には、関係がナイな。それデワただキマス。」

とある鉄錆臭い酒場にて（前書き）

題名修正しました

とある鉄錆臭い酒場にて

静かな酒場で男は上品にワインを啜る。酒場にしては珍しく、そこには人の気配などはない。いや、『ない』というのは少々表現が過ちであろう。正しく表現するのであれば『消した』とするのが正解か。

酒場の床はまるでひとつのワイン樽のなか。男が傾ける赤ワインよりも遙かに赤く稠々しい液体が床に溜まり、その所々に肉のかたまりや、砕けた骨の欠片が浮かんでは沈み、沈んでは赤い水に溶けてを延々と繰り返している。

「食後のワイン、というのもなかなかお洒落だ…」

俺ってまじかったー。

気の抜けるような、そんな能天気な声をこぼす男はあまりに平凡で、どこにでもいそうな、凡庸とした雰囲気を持つ青年だ。

サラリとした茶が混ざる黒い髪、陽気さを含んだやや小さな紫の瞳。顔つきはこれといった特徴もなく、極め付き整っているというわけでもないけれど、驚くほど醜いとも言えない。身長もとわりわけ高いわけではないが、かといって低いわけでもないどこまでも中間な男。それは、すぐさま人混みのなかに混ざり混んでしまうようなもので、人畜無害な印象しか与えない。しかしそれはもちろん、彼の身体中にべっとりとおびただしいまでの血液が付着していなければの話ではあるが。

「うわ、なんかえらいことになってんじゃねえか」

「あ、ティキ様。ちわーす」

酒場の扉を開けて入ってきた褐色の肌の男に、ワインを舐めながら挨拶。ティキと男が呼んだスーツを着こんだ男は、あるはずもない赤い液体が流れていない床を探し歩くが、結局は店内に入ることを諦めたように扉にもたれ掛かる。

「それで、わざわざこんなトコに出向いていったいどうしたんですか？」

のんびり、まるでここが虐殺現場だと忘れさせるような緩やかな態度と口調で空となったワイングラスをテーブルに置く。まさに態度も口調も人間そのものの、彼、へとティキは眺め、そして唇を持ち上げ親指で酒屋の外を親指で指差す。

「この騒ぎを聞き付けて教団連中が動き出しているから、餌場変えろって千年公からのお達し」

「あれ？おかしいなあ。あくまでも『ニンゲンらしく』殺してるつもりなんですけど」

「これだけ派手にやってそんな事言える図太さにビックリだよ」

あはは、バックに花が咲くような笑顔を浮かべて笑う男にティキはさりげなくため息を吐き出す。かなりの古株であるこの男とはずいぶんと付き合いが長い気がするが、それでも何を考えているのかわかったためしがない。いや、もしかしたら何も考えていないのかもしれない。というか、自分の中では間違いなくこの男は何も考えていないと認識している。所詮思考するだけ労力の無駄なのかもしれない。

「お前そろそろ千年公に通信回線直してもらえよ。いちいち直接情

報伝達すんのめんどくさいんだけど」

「いやあ、ははは。別にいいじゃないですかあ。本当にご迷惑をかけるときには伯爵様にお願いしますし」

「いや、俺が迷惑こうむってんだけど」

「だってその辺はティキ様だし。これがロード様ならちゃんと配慮するんですけど、めんどくさいし別にいいかなあなんて」

「自爆させんぞ」

「ごめんなさーい」

何がツボに入っただのか、青筋を浮かべたティキの姿を楽しげにコロコロ笑い転げる男に怒りもなえるというもの。とにかく事の次第は伝えたからなと、鉄さびの香りが充満するワイン樽の中からさっさと退散しようとするティキの背中に声がかかった。

「ティキ様、もし万が一小腹が減ってこの町廃墟にしてたらごめんなさいって伯爵様に伝えといてください」

にっこり。あまりにも人間らしく微笑む彼に手を振ることです承の意を表せば、なぜ自分がパシリあつかいを受けているのか、やや疑問に思うところもあるが、まあいいかと思考を停止。

そうして、1日、2日立たぬうちに一つの街が地図から消えることとなったことは蛇足なのであろうか。

死した町にて

ゴーストタウン。

この場所にはもつとちゃんとした名があったはずなのだが、今脳内に浮かぶ単語はそれだけである。観光客のために開かれた美しい外観を持つ町は今日の前にあるはずなのに、人がいない。ほんの昨日まで誰かが生活していた形跡があるのに、人の体温がまだ町に残っているのに、誰もいない。まるである日突然人という概念そのものを消されてしまったようで。

「全滅か」

おどおどとあたりを見渡す探索部隊男たちの中に混ざったエクソシストの男が空気のおいをかいで、そうつぶやく。眉間にしわがより、険しい表情がこの異常事態への焦りに拍車をかける。

「ア：AKUMAの仕業でしょうか」

「だろうな、結界装置の準備をしておけ。警戒を怠るな」

「は、はい！」

AKUMA、千年伯爵の手によって生み出された悪性兵器。人間を殺すことを目的に作られておりエクソシストが持つイノセンスでしか倒すことはできない厄介な存在。それがこの町の人間を狩りつくしたのか。いったい何匹？タダの人間が相手とはいえ町ひとつ丸々つぶすような規模であることは間違いない。そんなものがまだこの場にとどまっているのなら、ほかの場所へと移動する前に方をつけなければならぬ。自然と緊張が高まる一同の背中に不意に声が

かかった。

「ん？何の騒ぎだ？」

「！？ひ、人・・・？」

シンプルな服に身を包んだ紫陽花のような鮮やかな紫の瞳だけがいやに主張する地味な出で立ちの青年がそこにいた。まるで、この町の異常に気が付いていないような自然体のその姿に焦りという名の恐怖にかられていた探索部隊たちの気持が少しだけ落ち着く。ともかく、生き残りがいた。たった一人かもしれないがこれは奇跡に近いことかもしれない。

「自分たちは黒の教団の者です。アナタはこの町の人間ですか？」

「いや、ただの旅行者だけど。なにかあったのか？」

この町はもともと観光事業に力を入れていた。なるほど、彼もこの町に観光目的で来たのか。だからこそ、この異常な事態に自然体でいられるのかもしれない。もし彼がこの町の住人でAKUMAに襲われながらも命からがら生き残っていたのであれば、錯乱していてもおかしくない。それほどまでの状況なのだから。

「申し訳ありません、事情はお話することはできませんが、今の街は大変危険な状況です。我々が保護しますので、安全なところまで避難しましょう」

探索部隊の申し出に頭の上にはてなマークを舞い散らせている青年に、エクソシストは同情のまなざしで見る。彼からしてみれば憧れの観光地に来てみれば、町には人はいないわ状況をろくに教えても

らえないままに妙な宗教集団に絡まれているようなものであろう。それでも、疑問を顔に浮かべることはしてもそれをもんくとして口に出していないことはできた人間なのだろう。

「むむむ、避難は別にかまわないが、腹が減っていてなあ。食事に行きたいところなんだけど」

状況を理解していないがゆえにどこかのんきな青年の申し出に、対応していた探索部隊の男は苦笑を浮かべてやんわりとダメだという。彼の意見ももつともなところだが、ひとまずどこにAKUMAが潜んでいるかわからないこの状況において避難を後回しにすることは、死に直結しかねない。

「んー、困ったなあ。そろそろ限界なんだけど」

「できるかぎり近い避難場所へと案内します。それまでどうか我慢していただけませんか」

「いやあ…うん。そうだなあ我慢できるかな」

青年が苦笑を浮かべて、小首をかしげる。それを了承ととった探索部隊は結界装置を抱え、彼を案内するために先頭を切って歩き出す。それに従うように青年も後ろ3歩さがったあたりで歩き出し、エクソシスト含めた残った者たちはこれからどうするべきか、AKUMAがどこに潜伏しているのか、ともかく本部に連絡すべきだとかといった簡易的な作戦会議をしはじめた。

ドオンッッ！！！！

唐突、あまりにも唐突に響いた炸裂音。そして、重たい何かが倒れ

る音が重なる。それはまるで人間のようなにかが倒れたようなもので。そしてその連想は間違いなく当たっていた。さきほどまで青年の対応をしていた探索部隊の男が、先ほどまでであったはずの頭部を吹き飛ばされた探索部隊の男が、さきほどまで間違いなくもっていたはずの命の灯をかき消された探索部隊の男が地面に倒れている。その後ろでは青年がかわらずまるでなにもなかったかのようなのんびりとした笑顔を浮かべており、出会った時から何も変わっていないはずの、ゆがんでなければならないはずの笑顔を浮かべており、エクソシストたちの背中に不気味なまでに寒くて冷たい何かが走る。

「あ、ごめん。やっぱ我慢できなかったみたいだ」

あー…、腹減った。

にっこり人懐っこい笑みに浮かんだ感情。それは間違いなく恐怖。

屍の土にて

物言わぬ死体となってしまった同僚の体から地面にしみこむ赤い液体。頭を吹き飛ばされ、そこから漏れ出す脳漿と血液の存在をリアルに感じるまでに一度、冷たい風が吹き込み、青年の黒い髪を柔らかに揺らした。

「んー、ほんととはあんまり荒事を起こしたくはなかったんだけどなあ。いやー、どうにも空腹というものには耐えられないものだ、ニンゲンというものは。よりもよって十字架に手を出してしまった」

くすくすと、男がこぼす笑い声があたりに響く。そのあまりに柔らかな音と、地面に存在する死体があまりにもあわず逆に全員が確信する。この青年は人ならざるものであると。同僚を殺された探索部隊たちはいつでも展開できるように背負っていた結界装置を構え、エクソシストは自らの武器であるイノセンスを構える。それは、幅の広い大剣、俗にいうバスターソードと呼ばれる種の鋼鉄の剣である。

「貴様はいったい何者だ！！！」

エクソシストの問いかけに、笑みを絶やさぬ青年は子供が大人をからかうかのようにコテリと首を傾ける。くすくす、ころころ。空気を転がす笑い声がひどく不快であった。

「分^わかってるくせに」

笑う

「解^{わか}ってるくせに」

嗤^{わら}う

「判^{わか}ってるくせに」

晒^{わら}う

笑い声が建物に反響し、重なり、一人の声であるはずなのにまるで何人もの人間がいつぺんに発しているようで。重なる声やがて不協和音となり、そのひとつひとつが耳から脳へと認識された瞬間に不快感へと変換された。不快感はやがて恐怖へと、恐怖はやがて焦りへと、次々に感情は姿を変え、すべての感情は衝動へとなり替わる。逃げたい、この場から逃げなければ殺されると、ニンゲンに元来存在する生存本能を刺激する。たつぷりと血を吸いこんだ男の足の地面は、足を踏み出すたびにぐちゅりと、人の肉をかき混ぜているような音を立てる。その音も本来ならそんな連想をさせるはずもないのに、恐怖という衝動に支配されたものにとっては不吉なもの以外の何物でもない。

「俺が一体何なのか、十字架を背負うお前ならだいたいわかるだろうに。それとも俺の名前を尋ねているのか？それならばジャックとでも名乗ろうか。最近はジャックザリッパーをリスペクトしててな、カッコイイだろう、あいつ。ああ！もちろん彼のように女ばかりを殺すなんて偏食はしていない。好き嫌いは体に悪いからな。そうだろう？」

つらつらと、まるで自分の好きな作家について語っているかのよう
に、青年ジャックは語る。こちらへ、一步、また一步と近づく、地

面の土を踏みにじりこちらへと近づく。その顔に浮かんだ表情は笑顔であることには変わらない。しかし、ジャックの本質を理解してからはそれがひどく凄惨に見えた。ひどく気味悪く見えた。なぜ今までその笑顔を普通に見ることができていたのか…、全員がわからなくなるほど、それはあまりにも変化しないまま、あまりにも変貌した。

「切り裂きジャックと違い、俺はニンゲンの好き嫌いはしない。老若男女全員平等に俺のエサだ」

「AKUMAめ…!!」

「いいな、その顔！確実に目の前の敵を倒せるという傲慢なまでの自信にあふれながらも、俺という化物の本質に生理的な恐怖が浮かんでいる。これだからエクソシスト殺しはたまらない！」

歓喜の声とともにジャックはもろ手を振り上げて、空へと叫ぶ。その顔には餌を見つけた喜びと、その餌が高級食材であることの歓びがにじみ出ていた。人間の皮をかぶっているにもかかわらず、その本質があまりにも自分たちとは違う。AKUMAというものが真正の化け物であることが嫌でも理解させられる。

また一步、ジャックが近づいたところで探索部隊たちは機械を起動させた。

「結界装置展開ッッッ!!!」

スポットライトのように照射された光はジャックを包み込み、立方体の結界となる。その結界はミルフィューの生地のごとく幾重にも重ねられ、強固なものとなり、レベルの高いAKUMAであってもなかなか破れないほどの強度を誇るようになる。動きを強制的に止

められ、閉じ込められた本人はきょとんと目を丸くすればこつこつと己を邪魔する結界を軽くたたいて、なにかを考え込むようにうなり、ひとり呟く。

「科学の英知というやつか。中々に硬いじゃないか。さて、どうしたものか」

悩んでいる。その現状をうけとめ、人間たちの間に安堵の感情がめぐる。これでしばらく足止めをすれば本部から援軍を要請できる。エクソシスト1人で厳しいのならば数を増やしてもらえばいい。それが無理でもここから逃げることもできる。エクソシストを隠し、奇襲をさせることもできる。自分たちの勝率を上げることができる。

「今のうちに本部に連絡を！！エクソシスト様も今のうちに戦闘準備を！！」

パアアンツツツ！！！！

「…え？」

粉々に砕けちった、結界の光。その反動で結界装置の光照射部分にもひびが入り、煙が上がる。何が起こった。なにがあった。わからない、わからない！

「おお。デコピンで破壊できた！俺ってすげー！」

現状を受け止めることしかできない人間は、その後の展開を認識できない。希望が大きければ大きいほど絶望の可能性に鈍くなる。突きつけられた絶望に、恐怖に、死の足音に…。頭が真っ白になる。それを嘲笑うかのように、ジャックの陽気な笑い声は、透き通るよ

うに青い空に響き渡った。

勝利への道にて（前書き）

やたら長くなりました。駄目だ、バトル描写がやたらに難しい上にややこしい。見辛かったらすみません。まあ、ノリと勢いで読んでやってください。

勝利への道にて

幾重にも重ねて強化した結界をあまりにもあっさりと砕いて見せた目の前のジャックと名乗るAKUMA、そのにじみ出る狂気と実力に嫌な汗が流れるのをエクソシストの男は感じ取っていた。ちらりと、自らの周囲を見る。永遠とはいかなくともしばらくの間は防壁となすことができるはずであった結界装置を破壊されたことで、探索部隊全員が戦意を喪失し、迫りくる死の存在にただおびえることしかできない。この圧倒的不利の状況で、思わずエクソシストはぎりりと歯を噛み鳴らした。

「さて、どう料理しようか。殺すといってもいろいろあるからな…」

この状況を打開するには…、ひとりでも多くの生存者を教団に返すためには…、このAKUMAの足を止めるには…。思考を巡らせ、考える。自らと、仲間が生き残るあまりにも狭く感じる道を全力で探る。

「絞殺撲殺刺殺毒殺圧殺焼殺銃殺斬殺爆殺、あとはえーと何があったかな。活殺…は意味合い的に少し違うかな？」

さてはて、よりニンゲンらしい殺し方はどれか。とりあえず、ここにいるやつら全員、虐殺ルートであることは間違いないんだけども

じやりじやりじやり。足元の土を踏み鳴らしながら、ジャックはにこやかに軽やかに近づいてくる。吐いている言葉させなければ、普通の好青年と思えるような足取りで、雰囲気で。今更そんな錯覚を覚えることに違和感を感じながらも恐怖のあまり全員が立ち尽くす。ジャックは懷から小さな刃物を取り出した、小ぶりとはいえ切れ味

が異様によさそうな、柄にたっぷりの血をしみこませたナイフだ。
ぎらりと、太陽の光を浴びた刃が鈍く銀色に光る。

「ここはいっちょおしやれに、斬殺で惨殺にしようか。」

十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十

ガキンッ！

生き物の気配がない地で、二つの刃物が重なり、鉄同士が擦れあう
耳を塞ぎたくなるような音が響く。殺すか殺されるか、お互いを侵
し合うことができる二人だけが残った戦場。

「むむ、御荷物フラインダーを真っ先に逃がすとは恐れ入るな。こうやって自分
が戦ってなんとか時間を稼いで、その隙に応援を呼ぶつもりかな？」

エクソシストの大剣をナイフひとつでさばきながらも、一切の余裕
を崩さないジャックは手さえ塞がっていないければ、拍手をしていた
であろう態度である。転換もしていないAKUMAに傷ひとつつけ
られないエクソシストは、その態度に神経を逆撫でされ、舌をうち
ながらも一度距離をとるためにわざと大袈裟に剣を振り抜く。案の
定、衝撃を吸収するためにジャックは後ろへと飛び、二人の距離が
開いた。

「その意図がわかっているなら、なぜ探索部隊を追いかけない」

「俺、好きなものは真っ先に食すタイプなんだ」

「逃げても意味なしってことか」

思わず、笑みがこぼれる。そんな状況でないとわかっているのに、

なにかが滑稽で、なにかが可笑しくて。もしかすると人間、死を目前にすると恐怖により笑いが込み上げるものなのかもしれない。恐怖を隠すように異様に自分が興奮しているのがわかる、そしてそれに呼応して、自らの武器が息づいているのも。生きることを諦めたくない。なんとか勝利の突破口を見つけるために自然と口が回る。

「なぜ貴様は転換しない」

「言わなかった？よりニンゲンらしく殺したいんだよ。それに、本来の姿はあんまり好きじゃない」

「よほど醜いらしいな」

「いやいや、すっごくプリチーだよ、ヤバイよ？俺のボディは。もう、マスコットみたいな感じ。だけど戦いにくくてなあ、あの機能性のなさはただけじゃない、ただけないよ」

肩をすくめ、やれやれと首を降るジャック。転換しないということ、は、AKUMA本来の力を発揮しないことを意味する。嘗められている。だが、それを利用しない手はない。

エクソシストは、大剣の柄を手の甲から血管が浮き出るほど強く握りしめる。こちらを嘗めているならそうさせておけばいい。やつの気が変わる前に、少しでも可能性があるうちに。殺られるてしまう前に。

「AKUMAは総じて醜い、貴様が自画自賛してるだけだろう」

「あー、それ言うの？ひどいなあ、それ偏見だよ差別だよ。やだよー、差別主義者こわいよー」

自らの肩を抱き、ふざけ倒すジャック。けらけらと笑いながら、体をくねらせ、わずかではあるが隙が生まれた。

「(今だ・・・!)」

足の裏に力を込め、一気に加速。大剣を振りかぶり、持てるすべての力を流し込み、シンクロ率をあげられるだけあげる。

「(イノセンス、発動最大限、・・・開放!!)」

大剣から湧き出るイノセンスの暖かな光が体を包み込む。光は己とイノセンスをより強固に結びつけ、全ての身体能力を限界値を越えて、引き上げる。

壊れるかもしれない、だがコイツを生かしておいてはいけない。生かしておいてはダメなんだ。刺し違えてでも破壊する!!

「おおああああ!!!!」

「な・・・ッ!!」

油断していたジャックの首に刃がめり込む。そのまま、まるでハムでも切るかのようにあっさりとその肉体は両断され、驚きに目を見開いた好青年の顔はボールのように地面を弾み、彼方へと転がる。頭を失った体は傷からどす黒いオイルを滝のように吹き出しながら、ゆっくりと地面へと倒れ付した。

「や・・・やった・・・?」

AKUMAの血液に体を汚しながら、エクソシストは地面に大剣を突き刺しそれを杖がわりにする。

「はあ、はあ・・・ごふっ、ゲホッ!!」

熱く苦しいものが込み上げ、口から血へどが咳と共に吹き出た。身体中が軋む。想像以上に消耗が激しい、全身が震え視界がぼやける。身体がイノセンスに蝕まれているのがわかる。感じ取れる。けれど、生き残った。自分は勝ったのだ。今度は安堵に笑みが溢れる。

「は、ははは・・・っ」

うじゅり。

「はは、は・・・？」

うじゅうじゅうじゅ。ぐぢゅぐぢゅぐぢゅ。

気味の悪い音が辺りに響く。まるで蛆が集っているような水気を含んだ音。その出所は先ほど破壊したAKUMAの首なしの死体。傷口がボコボコと沸騰しているように泡立ち、それらが単体の生き物のように蠢いている。やがて蠢く泡はやがて肉塊となり、肉塊は皮膚となり、組織となる。

「あー、痛い痛い。痛すぎて狂ってしまいそうだ」

遠くに転がる頭が声を出す。目や口から血を流し、しゃべるたびにどす黒い液体を溢れさせながら、言葉を紡いでいる。

ギャハははハハ!!!

狂ったように笑いながら、意思を持った生首はゴロゴロと転がる。その声に応えるように、既に顎まで体を再生させた身体がゆっくり

と起き上がる。だらりとした真っ赤な舌や下顎に生え揃った並びのよい白い歯がはつきりと見える。そしてそれを覆い隠すように肉は泡立ち続け、みるみるうちに頬の肉が生まれた。

ナニガオキテイル？

自分ガ勝ツタハズデハナイノカ？

俺ハ一体ナニト闘ッテイルンダ・・・。

AKUMA？違う、悪魔だ、兵器でもなんでもない。本物の悪魔だ！

「う、あ・・・あ・・・！」

「隙を狙うのは流石エクソシスト。見事にしてやられたよ、はは。確かに俺の装甲は平常時も転換時もおぼろ豆腐みたいにやわいからね。結界を壊したことから攻撃特化型と判断したのかな？すごいなあ」

けらけらと生首は転がりながら笑う。血のあとを残しながら、文字通りに笑い転げている。まるで、それは悪夢のような光景だった。

「だからそんな賢いエクソシストにいいことを教えてあげよう。俺は確かに装甲が脆いけど、別に攻撃特化型というわけじゃあない」

ころころ、けらけら。

転がり回る生首を、再生を全て完了させたもうひとりのジャックが手に取り、持ちながらこちらを見た。そっくりそのままな4つの蜻蛉玉のような瞳がこちらを射抜く。ひっ、とひきつるような空気の音が喉から飛び出した。

『俺の暗黒物質ダークマターの能力は再生。俺の体のどこかにある核に致命的な

ダメージを与え破壊しない限り、俺はどんなダメージを受けても死ぬことはない』

ふたつのジャックが同時に口を開き、声はユニゾンする。平凡だが形のよい唇が弧を描き、つらつらと説明しながらこちらへとずんずん近づいてくる。最大限開放の反動と、恐怖で動けないエクソシストを見下ろすことができる位置で、足を止めた。

『腕が取れようが、足がもげようが、身体を木っ端微塵に爆破されようが核が機能していれば肉片から俺を再生できる。まあ、さすがに首ちょんぱなんて久しぶりすぎて再生に時間がかかったけど』

ごとり。生首を地面に落とし、同じ顔をした男が遠慮なしに踏み潰せば役目を失ったソレは短い断末魔と、肉が腐るような音をたててパシヤンとオイルの塊となり、地面へと染み込んでいった。

「ついでに言えば結界を壊したのも別に力業というわけじゃない。俺には複数の能力が備わっているからそれを使ったまでだし。まあ、だから、なんだ」

無駄な努力、御苦労様。

「くっそおおおお!!!!」

悪態が断末魔に変わり、それもやがて掻き消えた。主を失った大剣はごとりと地へと倒れ、中央に埋め込まれたイノセンスは輝きを失う。

真っ赤に汚した自らの掌を丹念にうまさうに舐め回しながら、ジャックは興味を失ったかのように死体を見下ろし、凄惨に微笑んだ。

「ね？痛いだろ、首切られるのって」

勝利への道にて（後書き）

現段階では脇悪役どころかチートクラスの能力を持つジャック（仮）一応きちんと弱点は考えていますが、今回はジャック（仮）の異様具合を際立たせるためやたら強いような描写をしました。ごめんね、名前すら考えていなかった名もなきエクソシストくん、噛ませ犬みたいにしちゃって。

とあるほの暗い屋敷にて

ティキは屋敷の食堂に入った瞬間、帰りたくなった。ああ、千年公のお呼び出しなど拒否すればよかったと、星のつくレストランのフルコースなどにつられなければよかったと。しかし、普段は着の身着のまま、白のときの友人たちと流浪するがごとく気ままに生きるホームレスという根無し草をしていると、暖かいオニオンスープだとか、ふわふわのパンだとかが時折無性に恋しくなるのだ。だから俺は悪くない。しいていうなら俺の腹の虫が悪いのだが、まあそれは言いっちなしということ。そんな思考をぐるぐる巡らせながら、自分の目下でむっしむっしとリンゴをほおばっている男を見た。

「なんでこんなとこにいんだよ、シモン」

「…さあ？」

ティキの質問にリンゴをむしむしするのをやめない青紫の目を持つ男、AKUMAのシモンは肩をすくめるように首を傾けた。たしかシモンには少し前に千年公からの餌場変える命令を伝えたばかりで、別にこの屋敷に来るような命令はされていないはずだが、ととりあえず自分の知るところの記憶の糸を手繰り寄せながらシモンの隣に空いていた席に腰を下ろす。ひたすらリンゴをほおばる男の前にはさらに山積みとなった真っ赤に熟したうまそうなリンゴがあり、さらにその隣には限界まで身を削り取られた芯がごろごろと。数えてみると7本あった。

「そんなリンゴばっかで飽きたりしないわけ？」

「……………」

質問したら無言で睨みつけられた。えー、なにこいつ、今日むちゃくちゃ不機嫌じゃねえか、わざとこっちに汁飛ぶように果物かじってやがるよ。普通ならば自分たちノアに絶対服従であるはずのAKUMAのあまりの不機嫌具合にドン引きしながら、ティキはテーブルに肘をつき頬杖を行う。普段、このシモンは無駄に長ったらしい理屈をこねたり、けらけら笑いながら人間論とやらを語ったりと、とにかくよくしゃべる陽気なやつなため、逆にここまでむっつりと黙られてしまうものすごく気まずいもの。かといって自分がAKUMAのご機嫌取りとするのもまた違う気もする。今のこの場には自分とシモンしかない、正直息が詰まる、しんどい、酸素がなんだか薄い。がりがりと固いものが噛み碎かれる音をBGMに、早く千年公ないし、ロード、むしろ双子でもいいからこの空気をかえてくれる人物は必要すぎる。もういちど、ちらりとシモンに視線を移すと果汁を目に飛ばされた。

「ぎゃあああ！！！！目が、目がアアア！！！！」

あまりの不意打ちに、通過させるのを忘れていた。どこかの悪役が言いそうな言葉を叫びながら遺物を押し流そうと涙を大量生産を行う両目を押さえる。ちくしょう、もう怒った、もうキレた！

「いい加減にしろよシモン！なにがそんなに気に入らねえんだ！」

「ティキ様の頭の上の股間に生えてそんなチリ毛にイラつきました」

「チリ…っ！頼むから天パって言うてくれない!？」

「あーい、どーもすみましゅえーん」

シモンが口を開くたびに、自分のイライラメータが異様な速度で溜まっていくのを感じる。いったい何がこのAKUMAをここまで暴走させているのか知ったことか！いや、若干気にはなるが、家族でもないやつにここまで馬鹿にされてへらへら笑っていられるほど残念ながら心は広くはない。ティキは手のひらにティーズを呼べばそのまま殺すつもりで掌打をぶつける。すると、戦闘能力自体はかなりひ弱な、下手をすれば人間よりも脆いシモンはきれいなまでに直線的に真横に吹き飛び、血みどろのひき肉のようになって壁に激突した。卵が甘くないだけでAKUMAの顔をぐちゃぐちゃにする甘党と同類のつもりはないが、それでもやっぱり自分もAKUMAには優しくないようで、食事前にぐろい物を作ってしまったため息をつく。まあ、どちらにしてもシモンはどれだけぐちゃぐちゃにむごたらしく破壊したところで、すぐに再生してしまう。そんなことを考えている間にも、壁一面に広がった血液や皮やこびりついた肉がぐちゃぐちゃと泡立ち、うごめき、一か所にあつまり、肉塊となり、やがてシモンとなった。服自体は再生できないのか、わずかな布を引っ付けた程度で見事なまでに全裸だ。

「ティキ様、いきなりなにすんですか。体一つ再生するのも結構大変なんですけど」

けほけほとせき込みながら、すこぶる不満げに顔をしかめ、ほぼ全裸のままリングの前の椅子にもどり、何事も無かったかのように席に着くシモンの図太さにMAXを示していたイライラ数値や頭に上った熱が少しずつ下がっていく。すこしだけ寒そうに身震いする程度で、まるで今さっきティキに攻撃されたことさえ忘れたように再びリングを手にしやりしやりとかじり奥歯で噛み砕き始めた。

（そういえば、こいつって俺らに殺され慣れてるんだっけか）

俺の直情的な怒りをかって。

だとか

甘党の無差別的理不尽な暴力にあって。

だとか

ロードによる残虐な虐待^{あそび}によって。

だとか

双子の自分勝手な暇つぶしのために。

だとか

シモンはかなり長い年月の間、千年公やノアとともにいると聞くがその再生の性質ゆえにいったい何度殺されてきたのだろうか。とにかく、自分が快樂のメモリーを受け継いだ時にはすでに彼は自分たちによって殺されることが当たり前であるのとらえ、数えることをやめたといっていた。最初の頃はかわいそうなやつだと感じていたかもしれないが、今となってはこのシモンを殺すことが自分たちの中でも当たり前になっている。はたして、このAKUMAはいったい何を感じているのか。

「なあ、シモン」

「おやVティキぼん、もう来ていたんですカV」

そんなティキの疑問を遮るようにひょうきんな道化のような恰好をした千年公が食堂に入ってきた。片手にレロをくるくるとまわしながら、ぴよいんぴよいんとスキップを踏み、ほかの椅子よりもよりふかふかとしたソファにぼすんと腰を下ろした。

「シモンも、ずいぶんと早く来ていたんデスねV」

「ええ、伯爵様のためであるならばたとえ何時間何日何週間でも待ち続けますとも」

「ハイハイV食べながらしゃべらナイV」

口調はティキに対するものなどとは比べ物にならないほどバカ丁寧だが、いかんせん話しながらもリングをかじり続けているからしゃべるたびに細かいカスが飛び散ってきた。それを千年公の遺憾を買ったのか容赦なしに彼はレロの切っ先を向けシモンの頭を吹き飛ばす。飛び散った脳髓やら青紫の眼球やらがオイルに変化し、テーブルクロスにしみこみウイルスが食べ物を汚染する。もう食べることはできない。そうして、ぐちゅぐちゅとまた新しいシモンが生まみ出されていく。

「お前さ、なんで今日そんなに機嫌悪いんだよ」

シモンが千年公に不敬を働くことはかなり珍しい。よほどへそを曲げていない限りは、こいつは創造主には愚民が神に対するがごとくの敬い具合を見せつける。だからこそ、ティキは気になった。だが、

シモンはリンゴを食べるために口を動かすだけで言葉を発しようとはしない。

「欲求不満デスヨVもしくは渴キV」

「はぁ？」

「実はこないだ、エクソシスト1人と探索部隊一個小隊を殺したんデスヨ、この子ハV」

「それってなんかいけないことなんスカ？」

またとんでもない暴れっぷりを見せたものだが、それがなにか悪い事なのか。AKUMAは人間を殺す以上にエクソシストを抹殺^{プログラム}することを最優先事項にしていたはず。つまり、シモンはただ本能に従っただけで。

「それだけなら、花丸満点あげるちゃうんデスガV」

「ですが？」

「ところがドッコイV探索部隊を殺すのに夢中になりすぎて、エクソシストが所持していたイノセンスを回収し忘れチャッタV」

とんだドジっ子！

本能に従いすぎた結果、持ち帰らなくてはならないものをその場に置き去りにしてしまったのか。

（そりゃ、千年公も怒るわな）

背の高いシルクハットからぽこぽこと怒りの煙が上がっているのが見える。ものすごくにこにこしているが、あの顔はものすごく怒っているときの顔だ。

「ダ・カ・ラVお仕置きとして彼には3週間の禁欲生活を送ってもらってるんデスヨV」

事実を告げられたシモンは余計苛立ったように、そのすべてのいら立ちをぶつけるかのようにリングをがりがりしている。すでに10個目だ。手のひらも唇も果汁まみれで、心なしか目が血走っている。正直むちゃくちゃ凶悪な顔つきだ。

「AKUMAにとって、殺さずは人間にとっての飲まず食わずの状態に近IVもしくはハ、薬物中毒者^{ジャンキー}にとっての禁断症状カナV人間の食物は決しテAKUMAの餓えを癒さナイV」

飲まず食わず、禁断症状。なるほど、それでシモンは苛立っているのか。体は殺したくて殺したくてたまらないのに命令のせいではできないから。潤わない、癒されない、満たされない。極限状態の拷問の中で彼はいったい何を考えているのだろうか。リングをひたすら食べ続けているのは少しでも満たされたいと考えているからなのだろうか。ティキは改めてこのシモンというAKUMAがあまりにも哀れな存在だと感じるようになった。

それからしばらくして、シモンはロードに引きずられていった。殺^{こわ}しても殺^{こわ}しても決して死なない玩具はロードの犬のお気に入りだ。なんどもなんどもロードの気の向くままに玩具は殺され、破壊され、痛めつけられ、引き裂かれ、引きちぎられ、飽きられたら外へと放り出される。まるでぬいぐるみのようなようだ。いや、そもそもぬいぐるみはそんな風に遊ぶものではないんだが…。

後日、シモンにロードのことを聞いてみると

「軽く50は殺されましたね。まあロード様にしては早く飽きられたんじゃないんですか？」

「いったいロードは普段シモンをどう扱っているのか、いろいろ複雑になる言葉だった。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5439x/>

脇悪役Aの死に様

2011年10月27日00時11分発行